

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15H02284

研究課題名(和文)発掘遺構による古代寺院建築史の構築

研究課題名(英文)Construction of ancient temple architectural history by excavated remains

研究代表者

箱崎 和久 (HAKOZAKI, Kazuhisa)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・部長

研究者番号：10280611

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 33,700,000円

研究成果の概要(和文)：発掘調査報告書から古代寺院の建物遺構の情報を収集し、北海道・青森・秋田・沖縄の各県を除く都府県で寺院の遺構を確認した。遺跡数は886件のほり、金堂は約194件、塔は約358件、講堂は約156件などであった。一方、軒瓦に関しては、寺院の造営に関連するため、官衙の遺跡についても収集し、寺院1046遺跡、官衙90遺跡のデータを収集した。これらは古代寺院に関する基礎資料として有用である。これらはそれぞれのデータベースを作成したが、報告書の記述に対する内容の吟味のほか、軒瓦の同範関係等に調整が必要で、公開には至らなかった。また、韓国語の関連書籍の翻訳、および中国の古建築や発掘現場の現地調査を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発掘調査の件数は増加しており、減少することはない。そうしたなかで、寺院遺跡に限らず、新たな発掘調査で検出した特徴的な遺構の位置づけを考えるため、あるいは特徴的な遺構の集合としての特徴を考えるためには、類例の調査は欠かせない。寺院遺跡は建物の機能のある程度推測できる遺構を検出できる場合が多く、また瓦を用いる特徴から、その造営体制などに迫ることもできる。このように、寺院遺跡には、遺構と遺物の両面からさまざまな観点の分析ができるメリットがある。本研究による建物跡および軒瓦に関する情報の収集は、基礎的な研究のための基盤となるものであり学術的意義は大きい。この情報の公開を確実にしたい。

研究成果の概要(英文)：We read the excavation report and collected information on the ruins of Buddhist temples in 7-12th centuries. As a result, the ruins of buildings have been confirmed in most prefectures in Japan, and the number of ruins is 886. Of these, there is about 194 in Kondo (Main Hall), about 358 in Pagoda(Tower), and about 156 in Kodo(Lecture Hall). On the other hand, since the collection of the patterns of the excavated eaves tiles is related to the construction of the temple, the ruins of the government office were also collected. As a result, data was collected from 1046 ruins for temples and 90 ruins for government office. These are useful as basic materials for Buddhist temples in 7-12th centuries of Japan. Each of these was aggregated as a database, but it was not made public because it was necessary to examine the contents of the description in the report and the relationship between the eaves tiles. We also translated related books in Korean and conducted a field survey in Chinese.

研究分野：建築史

キーワード：発掘遺構 寺院 建築遺構 古代 出土瓦

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 発掘調査成果による寺院建築史研究は、7～8世紀の特徴的な遺構を中心として行われてきた。発掘された建築遺構を集成した古代寺院建築史研究には、大岡 實による『南都七大寺の研究』(中央公論美術出版、1966年)、宮本長二郎「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」(『法隆寺と斑鳩の古寺』日本古寺美術全集 第二巻、集英社、1979年)があったが、その後、この種の研究はほとんど行われていない。発掘調査をとみなわない遺跡に対しては、石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』(聖徳太子奉讃會、1936年)があるが、その後の発掘調査によって訂正すべき点も多い。

(2) 一方、瓦の文様や製作技法等の研究によって、地方の官衙と寺院には密接な関係があることが明らかになってきている。また伽藍中心部(伽藍地)の建築だけでなく、周辺の寺院経営空間(付属院地)の建築についての情報も蓄積されてきた。さらに、いわゆる平地寺院だけでなく、山林寺院や村落内寺院とよばれる仏教施設の情報の蓄積と研究も深まってきた。こうした考古学の成果を建築史の観点から答える成果はほとんどない。

(3) 他方、韓国では近年寺院遺跡の発掘調査が盛んで、7世紀を中心とする日本の発掘遺構も比較検討の対象として取り上げられている。その成果は、石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』をベースにしており、これは最新の日本の情報が集成されていないことに原因があり、発掘調査成果をふまえてその成果を補完するとともに、日本から見た韓国の遺構について評価する必要がある。

### 2. 研究の目的

(1) 以上のような背景を踏まえ、本研究では、発掘された寺院建築遺構の集成を行い、現存遺構との比較、遺跡や発掘遺構相互の比較、山林寺院の堂塔の特徴、これらと平地寺院との異差、地域性や技術の伝播、などについて、具体的な様相を把握し、古代寺院建築史を再構築することを目的とする。

(2) また、東アジア諸国では、上記のように韓国で発掘建物遺構の事例収集が行われ、日本や中国と比較研究が進んできている。発掘事例が格段に多い日本の様相が判明すれば、韓国や中国における研究への新たな情報の提供を行うことができる。

### 3. 研究の方法

(1) 基本的には全国で確認されているすべての寺院跡を対象とし、発掘調査報告書にあたって発掘遺構の情報を収集する。すでに集成されている『古代寺院の出現とその背景』(第42回埋蔵文化財研究集会、埋蔵文化財研究会、1997年)や、『関東の初期寺院』(関東古瓦研究会第2回シンポジウム、関東古瓦研究会、1997年)などを参照するとともに、奈良文化財研究所で運用されている古代寺院遺跡データベースを参照しながら、もともとなる発掘調査報告書にあたる。発掘調査報告書は奈良文化財研究所に所蔵されているもののほか、所蔵されていないものは、図書館サービスの利用、および現地へ赴いての情報収集を行う。

発掘調査報告書から収集するデータは、伽藍中心部の堂塔の金堂、塔、講堂、中門、南門、回廊などの建物の場合、建物基壇の規模・外装の形式、掘込地業の有無とその規模、基壇築成方法、建物規模、柱配置、柱間寸法、雨落溝の有無、形式、階段とその形式、柱間との関係などである。これらのデータについては、当該部分の記述および写真や図面等をスキャンするとともに、コピーしてファイリングし、その図書記号などを控え、再検索が可能にする。

(2) これとは別に寺院跡出土の瓦の情報を収集する。県ごとに、寺院遺跡データベースを活用するなどしながら、軒瓦の同范関係と製作技法、および道具瓦の収集に主眼を置いて、発掘調査報告書からそれらの情報を抽出する。また寺院とともに官衙遺跡についても同様に情報収集を行う。これらについても関係部分のスキャンし、それを読み込んで文字化を行うとともに、軒瓦等の写真を画像データとして蓄積し、瓦シートとしてまとめる。

(3) 以上の遺構および瓦のデータをそれぞれデータベース化する。発掘遺構のデータベースは、EXCELを用いて、上記の収集データを入力する。柱間や規模等は、発掘調査で建物の一部のみ検出している場合に、推定の値を記入しているものがあるので、確定している情報はどこで、どこから信頼できる値なのかをわかるようなデータベースにする。

一方、軒瓦のデータベースは、上記瓦シートをもとに、年代、瓦当文様、製作技法、同范関係などを入力し、画像データとリンクさせる。

(4) 併行して韓国や中国における関連資料の収集に努める。これには、必要に応じて奈良文化財研究所と交流のある、韓国の国立文化財研究所や中国の中国社会科学院考古研究所の協力を検討する。関連する発掘調査があれば赴いて現地調査を行う。また身舎のみで妻側に虹梁を渡して入母屋造や寄棟造の屋根を造る日本の古代建築に見られない技法をもつ中国の現存建築、および石窟寺院等について情報収集および現地調査を行う。

(5) 収集した発掘遺構の資料およびデータベースから、金堂・塔・講堂・中門・回廊といった寺院の中心建築について、その規模や柱間寸法等について比較検討を行う。基壇規模と建物規模の差、あるいは柱位置と雨落溝を検出している事例から、軒の出を推定することができるので、合わせて組物等の検討を行うことができる。研究代表者である箱崎は、日本全国の塔遺構について「古代寺院の塔遺構」(2012年)をまとめており、これに準じて他の遺構のデータをまとめ、比較検討を行う。

さらに、中心伽藍周辺の付属院地に立地する建物、山林寺院の堂塔、村落内寺院の堂塔についても、同様の分析を行う。

一方、瓦の収集資料からは、軒瓦の同範関係を確認し、関連する寺院の様相をつかむ。

上記の建築および瓦の検討から、軒瓦と建築の関係を追求する。

(6) 上記の観点をまとめ、瓦研究者、古代寺院研究者、建築史研究者などを招いて研究集会を開催し、検討の内容を深める。

(7) 発掘遺構および出土軒瓦を中心とする収集資料と作成したデータベースをもとに、冊子体の資料集を作成する。検討の考察や研究集会の成果なども盛り込む。

#### 4. 研究成果

(1) 根本となる発掘調査報告書からの検出遺構収集作業は、京都や大阪に所在する大学の建築あるいは考古学専攻の大学院生や学部生を雇用し、奈文研が所蔵する図書資料を中心に網羅的に行った。事例が多い奈良県からはじめ、県単位で、近畿、四国、中国、九州、中部、関東、東北・北海道の順に進めた。その結果、北海道と青森、秋田、沖縄の各県を除く都府県で古代寺院の遺構を確認した。遺跡数は886件にのぼる。このうち、金堂は約194件、塔が約358件、講堂が約156件、門が約244件である。瓦磚類の出土が認められるため寺院跡であることはわかるが、基壇規模等から堂塔名を比定しているものなどもあり、建物の性格が明らかでないもの、あるいはその比定が推定の域を出ないものも少なくない。そもそも平地寺院で伽藍配置が明確なもの、すなわち広域に発掘調査が行われているものは、堂塔の比定が比較的容易だが、単独で検出されている建物や山林寺院では、その比定は容易ではない。さらに遺構の一部を検出した場合は、堂塔の比定の根拠となる建物規模も明確にできない。そうした事例が多いことは予想できたが、当初の予想を大きく上まわった。それでもそれらを研究資料として俎上に載せる方策を考えた。収集資料はデータベース化のため、本文と挿図、図面等をデータ化するとともに、ファイリングした。

収集した資料はEXCELを用いて内容のデータベース化を図った。できるだけ多くの資料をデータベースにあげていくため、その項目数が多くなり、結果的に資料入力時の混乱を招くことになってしまい、修正作業を行わなければならなくなった。

(2) 一方の、出土軒瓦の収集作業は、奈良・京都・大阪に所在する大学の考古学専攻の大学院生を中心に収集作業を進めた。軒瓦の同範関係から造営の背景を探るため、寺院遺跡だけでなく、官衙遺跡出土の軒瓦の集成を行った。その結果、本研究を通じて、寺院1046遺跡、官衙90遺跡のデータを収集した。収集資料はEXCELを用いて内容のデータベース化を図ったが、データが膨大となったため、一部入力内容を簡素化して進めた。同範関係の検討は、収集資料からおおよそ認められるものもあるが、その同定には胎土・焼成を含めた実物の詳細な検討が不可欠である。遺構の検討からそれらを絞ることも難しかったため、同定には至らなかった部分も少なくないが、基礎資料の収集は行うことができた。これらの資料の一部は古代瓦研究会が主催する資料集にまとめた。また、2020年に開催した第20回古代瓦研究会では、韓国の研究者を招聘し、主に鴟尾について日本の寺院出土鴟尾と韓国の鴟尾について比較検討し、議論を行った。なお、コロナ禍により2020年度に予定していた研究集会が開催できなかったため、およそ資料集はできているが刊行されていない。2021年度に延期になった研究会で刊行の予定である。

(3) 上記の発掘遺構と軒瓦の収集資料については、それぞれでデータベース化を進め、それを統合したデータベース化を図る計画であったが、それぞれのデータベースの精度の向上には、高度な専門的知識が必要なこと、また実物を熟覧しての検討が求められたこと、それらに当たる人員の確保が、主として時間的制約から研究協力者を含めて難しかったことから、なかなか進まなかった。このため、収集資料の資料集作成を行いながらそれらを補完する方法をとった。資料集作成にあたり、遺跡の配列を地域ごとに行うための市町村コードの入力や、収集した画像データ

のデータサイズが、個々ではそれほどではないものの、資料集として多数の画像を扱うには一般的な作業パソコンでは、処理能力が不足する事態となり、データの画像処理を行うという、当初想定できなかった作業が必要となり、最終年度に予算の繰越し処理を行って作業を進めたが、データベースの内容の吟味を含め、時間を要することとなり、資料集の完成には至らなかった。本研究では、そのとりまとめが十分ではないが、基礎資料の収集は十分に行うことができている。これを活用できれば発展性が十分に見込めるので、さらに地道な検討を進め、資料集の完成を目指すとともに、古代寺院遺跡データベース等に反映させることで、その責を果たしたい。

(4) 東アジアを中心とした類例の収集は、関連書籍の翻訳や現地調査を行った。韓国国立扶餘文化財研究所が刊行した『韓・中・日 古代寺址比較研究 - 木塔址編 - 』(2009年) および『東アジア古代寺址比較研究 - 金堂址編 - 』(2010年) ならびに『東アジア古代寺址比較研究 - 講堂址・僧房址・付属建物址・門址・回廊址編 - 』(2012年) は、韓国の古代寺院の発掘遺構を収集した基礎資料である。このうち、金堂址編は2015年に、木塔址編は2017年に、研究代表者を中心に監修し、奈良文化財研究所より日本語訳本を出版した。さらに2019年度には、講堂址・僧房址・付属建物址・門址・回廊址編の翻訳作業を行ったが、その後の校閲作業が十分でなく、現時点では内部資料の扱いである。

また、韓国における関連資料の収集として、以下の書籍の翻訳を行った。権鍾洵著『皇龍寺九層塔』美術文化、2006年(2016年度翻訳) 梁正錫『皇龍寺の造営と王権』図書出版書景文化社、2004年(2017年度翻訳)。皇龍寺は新羅の国家寺院で、現在も慶州に遺跡を残す。この塔の建立は645年であり、日本の百済大寺が639年に舒明天皇によって発願されているのと、ほぼ同時期である。皇龍寺の塔の遺構は、百済大寺跡と考えられる吉備池廃寺の塔の基壇規模とほぼ同じであり、日本への影響を考えるうえでは欠かせないと考えられたため、この2書を選択した。これらは校閲が済んでいないため、現時点では内部資料の扱いである。

2016年度には韓国の国立慶州文化財研究所に赴いて、慶州周辺出土瓦の特に道具瓦について調査を行った。

一方、中国の寺院遺跡の調査は少ない。2016・2017年度には、河南省鄴南城で中国社会科学院考古研究所が発掘調査中であった東魏北齊期の寺院遺跡に赴いて遺構を確認した。また、山西省南部(2015年度) 河南省(2016年度) 山西省西南部(2017年度) で、遼代・金代の建物で、身舎のみで手先をもつ組物を備えた寺院建築の事例や、小堂ながら手先を出す組物をもち、入母屋造や寄棟造の屋根をかける事例について実見した。日本の平安時代に当たる時期で、日本の現存事例が少ないためかもしれないが、上記の技法は日本の現存建築ではほとんど見られない。また中国の事例も、後世の修理をどれだけ受けているかといった調査・研究が十分でない部分も少なくない。短時間の滞在ではそうした情報の収集は不可能であるので、中国の研究者による調査・研究の推進に期待するほかなく、今後の研究にも注視していきたい。2018年度には甘肅省敦煌壁画と浙江省の古建築の調査を行った。敦煌壁画では、建物の隅棟に鬼瓦が2つもつ稚児棟を確認でき、日本古代にはこれがないと考えられていることに対して問題があることと認識した。浙江省の古建築の調査では、日本の禅宗様に当たる細部の構造・意匠をもつ建築を実見したが、日本には用いられなかった藻井等の細部もあり、また日本の禅宗様のように定型化していないことも確認できた。日本の禅宗様の定型化の時期やそうなる前の様相を考えるうえで、興味深い事例であった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 箱崎和久	4. 巻 18
2. 論文標題 発掘成果からみた興福寺の伽藍と景観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 能と狂言	6. 最初と最後の頁 112-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田由紀子	4. 巻 141
2. 論文標題 藤原宮の造瓦体制	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 古代	6. 最初と最後の頁 89-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 箱崎和久	4. 巻 なし
2. 論文標題 法興寺と飛鳥寺の建築	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本仏教はじまりの寺 元興寺	6. 最初と最後の頁 54-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 箱崎和久・鈴木智大・海野 聡	4. 巻
2. 論文標題 日本から見た韓半島の古代寺院金堂	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日韓文化財論集	6. 最初と最後の頁 239-287
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田由紀子	4. 巻 なし
2. 論文標題 白鳳か天平か、瓦が解決した「薬師寺論争」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 遺跡の年代を測るものさしと奈文研	6. 最初と最後の頁 123-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田由紀子	4. 巻
2. 論文標題 仏餉屋下層遺構出土の東大寺創建以前の瓦	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 東大寺の新研究	6. 最初と最後の頁 385-409
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田由紀子	4. 巻
2. 論文標題 平城宮の6225 - 6663型式軒瓦	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 古代瓦研究	6. 最初と最後の頁 3-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田由紀子	4. 巻
2. 論文標題 平城宮出土の東大寺式軒瓦	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 古代瓦研究	6. 最初と最後の頁 29-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 箱崎和久
2. 発表標題 発掘成果からみた 興福寺の伽藍と景観
3. 学会等名 能楽学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石田由紀子
2. 発表標題 本薬師寺と薬師寺 同範瓦からの検討
3. 学会等名 薬師寺建立をめぐるシンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 箱崎和久
2. 発表標題 日本古代の山林寺院とその建築
3. 学会等名 日本仏教総合研究学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 箱崎和久
2. 発表標題 山田寺出土建築部材の建築技術とその背景
3. 学会等名 中国科学技術史建築史専門委員会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 箱崎和久
2. 発表標題 平城宮第一次大極殿の復元とその意義
3. 学会等名 楊鴻勛建築史学国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田由紀子
2. 発表標題 藤原宮出土瓦の年代と生産体制
3. 学会等名 中国社会科学院考古研究所2019年度考古研究系列学術講座（第15講）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 古代瓦研究会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 奈良文化財研究所	5. 総ページ数 399
3. 書名 『鴫尾・鬼瓦の展開 鴫尾 - 』	

1. 著者名 古代瓦研究会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 奈良文化財研究所	5. 総ページ数 380（予定）
3. 書名 『鴫尾・鬼瓦の展開 鬼瓦 - 』	

〔産業財産権〕



〔その他〕

一般向けの寺院建築に関する講演会：8件（箱崎和久）			
---------------------------	--	--	--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石田 由紀子  (ISIDA Yukiko)  (40450936)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員    (84604)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	清野 陽一  (SEINO Yoichi)		
連携研究者	鈴木 智大  (SUZUKI Tomohiro)  (60534691)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員   (84604)	
連携研究者	海野 聡  (UNNO Satoshi)  (00568157)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員   (84604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------